［地域総研紀要　6巻1号, P33－42（2008）（一般論文）］

地域づくりにおける地域リーダー養成のあり方をめぐって*
―タイＮＧＯの若者スタッフの事例から―

菅原良子**・開浩一***・入江詩子**

Idea of Leader Training at Community Development
— Cases of Youth NGO Staffs in Thailand —

Yoshiko Sugawara, Koichi Hiraki, Tomoko Irie

キーワード：地域づくり　タイ　ＮＧＯ
地域リーダー養成　若者

要旨

近年の「地域づくり」「まちづくり」においては住民参加型の重要性が指摘され、住民主導による「地域づくり」「まちづくり」が求められている時代になっているといえるが、その担い手の養成、とくに活動の中心となる地域リーダーの養成のあり方についてはこれからの課題といえるであろう。本稿では、地域づくりにおける人づくりの必要性と地域づくりの担い手としての役割、および身につけるべき能力について検討するとともに、タイのＮＧＯのスタッフである若者の事例から地域リーダー養成のあり方についての考察を行った。

はじめに

近年、日本でさかんになっている「まちづくり」「地域づくり」は、ハード中心からソフト中心へ、行政主導から住民参加型へと変化してきている。また国や地方自治体の財政悪化にともない、市町村合併がすすみ、安心・安全で住みやすい地域をつくっていくためには、行政に頼らず地域住民自らが、自分たちで地域のことを考え、自分たちで安心・安全で住みやすい地域をつくっていくための活動を行っていくことが求められているといえよう。しかしながら、高度経済成長期以降、若者の都市への人口流出は続き、地域共同体は崩壊し、地域における人間関係も希薄化していく中で、「まちづくり」「地域づくり」に関わる活動を維持し続けるのは、難しい状況にあるともいえる。このような状況の中で、「まちづくり」「地域づくり」の担い手の育成、とりわけ地域リーダーの養成は急務といえるであろう。

他方、社会開発や国際協力の領域においては、1990年代に入り「参加型開発」の理念・手法が取り入れられるようになっており、そこでは、「住民参加」「住民主体」が重視され、住民のエンパワーメントのプロセスが重視されている。その中に、日本の「まちづくり」「地域づくり」の担い手育成のあり方についての示唆を得られることがあるのではないだろうか？

本論文では、以上の問題意識にもとづき、「地域づくり」における人づくりという視点から、「地域づくり」の担い手としての役割や身につけるべき能力について先行研究を検討するとともに、タイにおいて、住民の農村開発、環境保全、エイズ予防・共生の問題に取り組んでいるNGO―Raks Thai Foundationで働く現地採用された２人の若者スタッフの活動内容やトレーニング内容、活動の中での自身の考え方の変化などについて聞き取り調査をおこなった結果をもとに、地域リーダー養成のあり方について検討したい。

１．地域づくりと人づくり

近年、「まちづくり」「地域づくり」という言葉が様々なところでさかんに使われるようになっているが、その理念や内容はその時代により変化してきているといえるであろう。例えば、斉藤は「“まちづくり”という言葉は、その時代の地域づくりの市民感覚や社会的な価値観が投影された言葉である」[1] とし、1960年代の経済を中心とした都市開発や地域開発は公害問題などをひきおこし、そのことによりこれまでの開発のあり方が見直され、都市づくりや地域づくりに市民性、地域性、環境性などの考え方が導入されたとしている。そして、「それまでの産業優先から生活環境へ、ハード中心の物的計画（都市基盤整備、大規模開発等）にソフト重視の社会計画（市民の参加や生活サービスの強化・充実等）を加えた都市づくり、地域

* Received February 4, 2008
** 長崎ウエスレヤン大学　現代社会学部　地域づくり学科
*** 長崎ウエスレヤン大学　現代社会学部　社会福祉学科、Faculty of Contemporary Social Studies, Nagasaki Wesleyan University, 1057 Eida, Isahaya, Nagasaki 854-0081, Japan

づくりの考えが強められた」[2] としている。

このように時代とともに「まちづくり」「地域づくり」の意味合いが変化するとともに、その主体も変化してきているといえるであろう。それは、かつて「都市計画」と呼ばれた「ハード中心の物的計画」がなされていた時代には、行政主導で「まちづくり」「地域づくり」がなされてきたが、「ソフト重視の社会計画」が中心となっている現在の「まちづくり」「地域づくり」は、地方分権の流れもあり、行政主導によるトップダウン型では成り立たず、市民主体の「まちづくり」「地域づくり」が求められているということである。つまり、地域住民自らが自分たちの地域のありかたを考え、地域づくりのプランをつくり、実践する中で、行政や企業やＮＰＯなどと連携しながら住みやすい地域をつくっていくことが求められているといえる。

ここにおいて重要なことは、市民がいかに地域づくりに関する知識やスキルといった、地域づくりに関わっていく力量を身につけていくかということである。とりわけ、地域づくりの実践をひっぱっていくリーダーをどのように養成していくかが鍵になると考えられる。龍谷大学の地域人材・公共政策開発システムオープン・リサーチ・センター（LORC）では、「自治・分権」を基礎とする「あたらしい社会において地域公共政策の過程をになうひとびと」を「地域人材」として位置づけている。[3] そして「地域人材」分布イメージを、潜在的な地域人材としての広範な市民層、非職業的な多様な市民活動主体、ＮＰＯ・ＮＧＯスタッフや自治体職員などの職業専門人、高度職業専門人の４つに分類し、「多様な専門分野や職業をもつ『地域人材』、『自治・分権』の担い手となる人々が社会のなかに広くいること、その能力を発揮できる状況にあることが、求められている」[4] としている。「地域人材」という言葉が適切であるかどうかはともかく、現代の「まちづくり」「地域づくり」において、その担い手の育成が課題であるという指摘は、重要な指摘であるといえるであろう。

では、「まちづくり」「地域づくり」の担い手として、どのような役割がもとめられており、そのためにどのような能力、スキルが必要となるのであろうか？

佐藤は[5]、「まちづくり」「地域づくり」おいて必要なのは、「自らの要求を獲得していくと同時に、様々な立場の人たちの要求もその中に組み込みながら、トータルとしてまちづくりが行える人材」であるとし、その「人材」を「地域プロデューサー」として位置づけている。そしてその役割を「自治体や企業、地域住民やＮＰＯなどの市民団体を巻き込みながら、人材の問題、資金調達、コーディネーションといった様々な役割を持ってプロデュースする人材」として位置づけている。

また、世古は、「これらの市民社会を真に参加、協働型にしていくためには、市民セクターの力量形成を行い、市民のつぶやきを形にできる新しいリーダー像とリーダーシップを作り出すことが必要」[6] であり、「参加型社会のリーダーに求められるのは、参加者の声をよく聞き、つぶやきを形にしていく、参加のデザイン能力、合意形成能力である」[7] としている。そして、このような能力を持ち、社会的な役割を果たす人を「協働コーディネーター」と名づけている。

「地域プロデューサー」が資金調達や他団体とのネットワークづくりも含め、「まちづくり」「地域づくり」全体をトータルとしてプロデュースしていく役割であるのに対し、「協働コーディネーター」は、「まちづくり」「地域づくり」に係わる会議やワークショップ、委員会の場、プロジェクトをすすめていく過程で、様々な参加者を中立的な立場からファシリテートし、参加をデザインしコーディネートしていくという点が重視されるとともに、「専門職能」として位置づけられており、それぞれその役割は異なったものとしてとらえられている。しかしながら、「地域プロデューサー」も「協働コーディネーター」も、「まちづくり」「地域づくり」において必要なのは、単に「まちづくり」「地域づくり」を担う市民というだけでなく、「まちづくり」「地域づくり」に関わる様々な人を巻き込み、「まちづくり」「地域づくり」全体をとりまとめていく人、リーダーが必要であるという点では共通しているといえるのではないだろうか。

しかしながら、今の日本においては、「まちづくり」「地域づくり」を担うべきさまざまな潜在的な能力をもった市民たちが、その力量を身につけていくシステムやカリキュラムが整備されているとはいいがたい。ＮＰＯや市民活動や行政主催の講座などの一部の限られた場で、ファシリテーターとしてのスキルアップ講座やリーダー研修などが個々に行われている状況であり、「まちづくり」「地域づくり」の全体を見回した上で、長期的な視点で担い手を育てていくシステムやカリキュ

ラムは、まだまだ整備されていないといっても過言ではないであろう。

他方、1989年にＯＥＣＤ（経済協力開発機構）の開発援助委員会（ＤＡＣ）が「1990年代の開発協力に関わる政策声明」の中で、1990年代の開発援助における最重要課題として「参加型開発」を提唱しているように、1990年代に入り社会開発や国際協力の領域において「参加型開発」の理念・手法が取り入れられるようになっている。そこでは、「住民参加」「住民主体」が重視され、住民のエンパワーメントのプロセスが重視されている。

そこで、次章では、タイ国内において、原則として現地の住民をスタッフとして採用し、地域において農村開発、環境保全、エイズ予防・共生の問題に取り組んでいるNGO—Raks Thai Foundationで働く現地採用された２人の若者スタッフの活動内容やトレーニング内容、活動の中での自身の考え方の変化などについて聞き取り調査をおこなった結果をもとに、地域リーダー養成のあり方について検討したい。

２．NGO：Raks Thai Foundationの活動～タイ北部パヤオ県における取り組みを事例として～

（１）NGO：Raks Thai Foundationの概要

ここでとりあげる事例は、タイ全土で活動しているNGO：Raks Thai Foundation（以下、ＲＴＦ）の活動事例である。ＲＴＦについてはすでに別稿で詳しく述べられているので[8]、ここではＲＴＦの組織概要と活動内容について簡単にふれておく[9]。

ＲＴＦは、もともとは、第二次世界大戦における被災者救済のために1945年にアメリカで発足した（現在の本部はブリュッセル）、世界最大規模の国際ＮＧＯであるCARE Internationalの開発途上国現地事務所の一つとして1979年に発足し、その後、1997年にタイ政府の認可を受けて財団化し、CARE Internationalから独立してつくられたＮＧＯである。これまでに、農村開発、家内工業育成、環境保全、山岳民族開発事業、エイズ予防および共生教育、全国各地の学校での環境・衛生・エイズ教育の副読本プロジェクト等の事業を実施している。その中で重点がおかれているのは、住民のニーズを汲み上げ、より自立した生活に反映できるようなプロジェクトの計画を組み立て、主として人材育成、教育訓練、コミュニティの開発、リーダーシップの養成、技術指導などの事業を行うことである。現在は、タイ全土に構えている８カ所の事務所を中心として、タイにおける３大問題—農村部の貧困問題、環境問題、エイズに対する取り組みを中心に事業を行っている。約100人のタイ人スタッフが働いており、基本的に現地の出身者を採用している。一般的にＮＧＯの活動の重点はそれぞれのＮＧＯによって異なるが、ＲＴＦの特徴は「人材養成」、「人づくり」に力を入れていることである。

以下ではＲＴＦの８カ所ある事務所のうち、タイ北部にあるパヤオ事務所で働く２人の青年スタッフのケースを事例として、地域リーダー養成のあり方について検討したい。

（２）パヤオの概要とＲＴＦの活動

パヤオ県はタイ北部に位置し、タイ北部の大きな２つの観光地チェンマイとチェンライの間に挟まれた人口約50万人の地域である[10]。農業が主要な産業ではあるが、タイ国内でも貧しいとされるこの地域では、都市部や海外に出稼ぎに行く農民も多い。パヤオ県では、1989年に初めて１名のエイズ患者と６名のＨＩＶ感染者が確認されて以降、1990年代に入り、ＨＩＶ感染者およびエイズ患者の数が爆発的に増加し、エイズは深刻な地域問題となった。このような状況の中で、ＲＴＦは1993年にパヤオ県で「地域の多様な階層に存在している組織や集団に対して、彼ら自身がその地域にある問題を受容し、解決に向けての活動」[11]、具体的にはフィールドエデュケーションや、コミュニティ・ヘルスボランティアやＨＩＶに感染した人へのエイズ教育、ＡＩＤＳ患者やその家族を支援するしくみづくりなどの活動を開始し、現在に至っている。以下は、現在ＲＴＦのパヤオ事務所で働いている２人のスタッフからの聞き取り調査の結果である。

３．ＲＴＦの活動におけるスタッフの成長～２人のＮＧＯスタッフの聞き取り調査から～

（１）調査期間、調査方法

2006年７月に筆者３名は、タイパヤオ県において、ＲＴＦを介してパヤオ県のＨＩＶ感染者および地域住民、ヘルスケアセンター職員、小学校の教員、ＲＴＦのスタッフおよびボランティアなどに聞き取り調査を行った。この聞き取り調査は、筆者の入江が約10年にわたり、ＲＴＦと研究や支援活動を通じて親交を続けており、また2002年度からはＲＴＦにコーディネートを依頼して行っている海外コミュニティサービスプログラムにおい

て、毎年本学学生を連れて行くなど、ＲＴＦとは長年の交流が続いているという関係の中で、ＲＴＦの協力のもとに実現したものである。

調査方法としては、筆者らの日本語の質問を、通訳者にタイ語に通訳してもらい、また調査対象者のタイ語での話を日本語に通訳してもらうという、通訳者を介した聞き取り調査になっている。次の（２）は、ＲＴＦの２人のスタッフのタイ語での語りを、日本語に通訳した内容を筆者がまとめたものである。聞き取り調査はＲＴＦのパヤオ事務所において２人同時に行い、調査時間は約３時間であった。また各項目の「※」の文章は、聞き取り調査を受けての筆者の考察である。

（２）聞き取り調査結果[12]

①対象者

＜Ａさん＞

年齢31歳。女性。20歳のころ、地元のチェンライ県がタイの中でも一番エイズ感染者が多かった時期に、ＲＴＦの前身であるCARE International Thailand（以下、ＣＡＲＥ）がチェンライで活動を開始し、青少年に対してエイズに関するトレーニングを行ったときに、そのトレーニングに参加したのがきっかけで、ＣＡＲＥの様々な活動に関わるようになった。1995年頃にはＣＡＲＥの活動の中から生まれた若者を中心としたグループで活動をおこなうとともに、ＣＡＲＥ／ＲＴＦのチェンライでのエイズ予防キャンペーンに10年間にわたりボランティアとして関わった。その後2004年５月から、ＲＴＦのコドモファンドのフィールド・オフィサーとしてパヤオ事務所でＲＴＦスタッフとして働いている。子どもを対象としたプロジェクトに関わり、パヤオ県内のチュン郡の地域を担当している。

＜Ｂさん＞

年齢26歳。女性。大学を卒業後、パヤオではない別の県にあるＲＴＦの事務所にスタッフとして採用された。その後2004年12月におこったスマトラ沖地震で発生した津波によりタイ南部が大被害に会い、ＲＴＦが行った津波の被害者支援のプロジェクトに５カ月関わり、その後パヤオ事務所で働いている。子どもを対象としたプロジェクトに関わり、パヤオ県内のドッカムタイ郡の地域を担当している。

②活動に参加するようになったきっかけ

＜Ａさん＞

①でも既に述べているが、ＡさんはＣＡＲＥが行ったエイズに関するトレーニングに参加したことが、その後様々な活動に関わるきっかけになった。そのトレーニングに参加した理由は、エイズに関する知識を何も持っていなかったこと、またこの頃は地域でもエイズに関する知識は普及しておらず感染者に対する偏見や差別が多い中で、一緒に地域の中で感染者の人と生活していく中で、どういうふうにしたら理解できるのか、自分の事を守ることができるのかを知りたかったからである。その後、活動の中で自分がトレーニングを行ったりするなど伝える側になっていった。

＜Ｂさん＞

Ｂさんは、Ａさんが行ったトレーニングに参加したことがきっかけで、Ａさんから誘われて自分の友達に伝えていたり、トレーニングを提供したりする側になった。Ａさんに誘われたときは、すでに村の中で青少年のリーダー的存在ではあったのだが、エイズに関しては、まだ自分自身も知識をそんなに持っておらず、友達に伝えることができなかったので、やってみようということで始めた。もう一つの理由としては、村の人たちがやはり若い人たちに対して、「若い人たちは問題ばかり起こしている」というイメージを持っていたので、そういう人たちに対してそうじゃないのだと、私たちも何か村のためにできることがあるし、何か問題をおこしているだけではないのだということを示したかったということもあった。

※Ｂさんは、Ａさんから声をかけられて活動に参加しているように、地域での先輩から後輩への働きかけ、かかわりあいがあること、また、活動に参加するにあたっては、２人とも、エイズが深刻な地域問題となっている状況の中で、そのことに関する知識を得たい、またその問題に自分がどう取り組んでいくかという問題意識があることがわかる。

③ユースグループでの活動内容とその役割

＜Ａさん＞

ユースグループでは、自分の友達や、知り合いに対して色々な知識を広げていく活動、学校で子どもたちや若者に対して色々なトレーニングをおこなうこと、エイズに関しての知識を提供するキャンプを学校や子どもたちに行うこと、エイズに関

わる色々な問題についての相談役としての活動を行っていた。方法としては、人形を使っての劇を取り入れたりして伝えていた。

ＲＴＦがチェンライで活動を行っていた期間は、1995年からの５年間であったが、ＲＴＦがチェンライから引き上げた後も予算的な支援はなかったものの、相談などの活動に対する支援をＲＴＦから受けながら、ユースグループの活動を続けていた。その目的としては、コミュニティの中で新しいユースリーダーやユースボランティアを育てていくことも目的としていた。

＜Ｂさん＞

村やタンボン[13]レベルでは、子どもの日などにスポーツ大会のようなものを自分たちで企画して行ったりした。「若い人たちは問題ばかり起こしている」というイメージを持っていた村の人たちも、理解してくれて資金的な援助をしてくれるようになった。

また、エイズに関することを伝える活動という点では、週末、30分ほどのラジオ番組を通して色々な情報提供の活動も行っていた。

※ユースグループの活動では、同年代のユースや子どもたちを対象に活動していたこと、その内容は様々な手法を使った主に知識の提供であったことがわかる。ユースグループの活動が新しいユースリーダーやボランティアを育てることを目的としていたことは、注目すべき点であると思われる。また、ＲＴＦはその地域からひきあげた後もユースグループの活動を支援しており、またユースグループは行政など、地域の他の組織との連携もとっている。他の組織や地域の大人のサポートを受けながら、ユースグループの活動が続けられており、ユースグループの活動自体が、地域リーダーを育てる役割を担っているといえる。

④これまで受けてきたトレーニング

＜Ａさん＞

・エイズに関する教育
・性教育
・性と生殖に関する教育
・子どもの権利
・リーダーシップについて
・ラジオ番組の作成について
・劇のやり方
・調査方法に関するもの
・エイズの在宅ケアについて
・プロジェクトの企画・実施・運営方法

など、とてもたくさんのトレーニングを受けた。これらはすべてユースグループの活動を行っていたときに受けたもので、ＲＴＦのスタッフになってから受けたトレーニングは、子どもに対するゲームのやり方とケースマネージメントについての二つのみである。

ユースの時に受けたトレーニングは、ユースリーダーになるための色々なスキル―知識を人に伝えていったり、トレーニングを他の人に提供していったりなどのスキル―に関するトレーニングが多かったと思う。

これらのトレーニングに参加する中で、とても恥ずかしがりやで体型を気にして自分自身を表現することができなかった自分が、自分自身の考えを人に伝えなければいけなくなり、人前でトレーニングをする側になることで、話せるようになったこと、自分を表現できるようになり、多くの人と関わる場に出る機会があったことがとても良かった。

＜Ｂさん＞

受けたトレーニングの内容は、基本的にはＡさんと同じである。一つ違うのは、別の事務所のスタッフの時に、マイクロクレジットのような活動の担当をしていたので、会計の管理についてのトレーニングを受けたことである。

これらのトレーニングの中で、知識と人に伝えていくための手法を学べたことがとても良かった。好きなトレーニングはゲームについてのトレーニングだった。

※ユースグループで活動していたときに、実に非常に多様な内容のトレーニングを受けていたことがわかる。そのトレーニングの内容は活動を行っていくうえで役に立つ実践的な内容となっており、これらのトレーニングが同じような活動を行っている仲間と出会う機会になっていた。また、これらのトレーニングにより、自分に対して肯定的なイメージを持てなかったのが、自己表現ができるようになり、自分に自信を持てるようになるなど、自己信頼感を培う場になっていたといえる。

⑤自分が行っているトレーニング

＜Ａさん・Ｂさん＞

自分が受けたトレーニング、ほとんど全部のトレーニングを行ってきた。プロジェクトの運営方法だったら、村長に対し村で何かプロジェクトを行うときにどういうふうにやるか、親に対しては感染している子どもの面倒をどういうふうにみていくかなど、様々な階層の人を対象に行ってきた。

今まで受けてきたトレーニングは、得た知識やスキルを人々にそれをどんどん広げていくということが一つの目的なので、ほとんど同じようなものをみんなにしてきた。

※トレーニングを受けた内容は自分のものだけにとどめるのではなく、人々に伝えていくという目的を持っていることを認識し、実際に地域の人たちに伝えていっている点が注目される。

⑥活動を行っていて良かったと思うこと

＜Ａさん＞

一つは仕事をするようになってから、コミュニティの中で自分のプロジェクトを考える時に、コミュニティの強化についても考えられるようになったことがある。たとえば、困っている人がいたら何かをあげるということは簡単にできるけれども、それが本当のいい支援ではなくて、例えばコミュニティの中で実際に自分達が抱えている問題についてどういうふうに自分たち自身で改善していかなければいけないかとか、そういったことを考えるお手伝いをするということが仕事だと考えられるようになった。政府のこれまでの支援の方法とかというのも、何か予算をあげるなど、そういうことだけだったが、ラックス・タイのやり方というのは、そうではなく、村の人達にも関わってもらって、問題を一緒に解決していこうという、そういうスタンスをとっておこなってきているので、それがよかった。

また、ここでの仕事の経験を自分の人生、自分の生き方においても色々活用することができて、自分の人生をどうやって生きていくかについても、自分が若かった時は今が楽しければいいと思っていたけれども、ラックス・タイの活動に関わるようになってからは、色々なことについて考えられるようになった。

そして、色々な人と自分の考えを交換することができるようになったこともよかった。他のプロジェクトに関わっているラックス・タイのスタッフや、ベトナムや日本などの色々な国からのボランティアなど、色々な国の色々な人たちと交流する機会を与えられたことが自分にとって良かったと思う。

＜Ｂさん＞

一つは、ラックス・タイと関わるようになってから、活動範囲がより広がったということ。（ラックス・タイと）関わる前というのは、子どもとか、友達同士だけで（活動を）やっていたので、それ以外の人達に対しては、何も特に活動をしていなかった。村の人達に対して、例えばエイズについての色々な情報を提供して、どういうふうに感染者の人たちをみんなで受け入れていくか、どういうふうにしたら感染者の人たちがより過ごしやすく、より健康に生活できるかということを、村の人達に広めていくことができた。

以前は感染者の人に対して政府が行っていた支援は、援助金というかお金を与えることだけで、感染者の人たちもそれに頼って生きるしかなかったけれども、こういう活動をするようになってから感染者の人たちもコミュニティの中で、お金のことだけを考えるのでなく、自分のコミュニティにおける役割というのを考えてもらえるようになったと思う。

※活動する中で、地域支援のあり方について資金の提供だけでは本当の地域支援にはならず、大切なことは、自分たちで考え自分たちで解決していくこと、それを支援していくことがＮＧＯの役割であることについての気づきがある。また、活動の中での仲間との交流により意見交換をすることが良い影響を与えている。さらに、ユースグループでの活動とＲＴＦの活動の違いは、大人に対しても活動を行っていることであり、その中で若者が大人と一緒に活動を行える力量を身につけていることがわかる。実際に、私たちがＲＴＦの活動に同行させていただいた際にも、ＲＴＦの若者スタッフが地域行政組織の職員や学校の先生、ヘルスケアセンターの職員などといった大人と対等に活動内容などについて意見交換をしたり交渉したりするなど、大人と対等にやりとりしている場面を何度も見ている。

⑦エイズの問題に関わる前と関わった後の考えの変化

＜Ａさん＞

エイズの問題がまだ起きてくる前は、そんなにやっぱり自分の人生に関して考えることがなく、普通に過ごしていたけれども、エイズの問題が大きくなってきてからは、自分自身もエイズに感染する可能性がある人間の一人なのだという認識をするようになり、それからは色々なエイズに関する知識とか情報というのをできるだけ集めて自分で取り入れるようになった。

村の人たちも、エイズという問題が起こってくる前は、別に普通で、別に特に何も考えてなく、いつもどおりの生活をしていたように思うけれども、エイズの感染が拡大していく、その問題が大きくなっていくにつれて、やっぱりエイズに対する恐怖とか偏見とかそういったものが徐々に大きくなってきた。その後、色々な機関とか行政が入ってきて、エイズに関する知識とか情報を村の人達に与えるようになってから、村の人たちのそういうエイズに対する恐怖とか偏見とかというのは徐々に、徐々になくなってきて、今では、まぁ大方みんな感染している人たちを受け入れられるようになり、一緒に普通に生活をすることができるようになってきているけれども、やはりまだ少し村の中で偏見とかそういうのは残っていて、例えばエイズでお父さん、お母さんを亡くした子どもなんかについては、「もしかしたらあの子も感染しているんじゃないの？」というようなことを言う人たちもいるし、この子達が将来的にどういうふうに生きていったらいいのだろうという心配事もある。

＜Ｂさん＞

まず一つは、ラックス・タイと関わる前はエイズという病気自体について知らなかったけれども、Ａさんがトレーニングをしてくれた時に、初めてエイズという病気があるということを知った。それからエイズの感染方法についてとか、予防の仕方とか、どういった症状が出るのかとか、そういう色々なことについて、そういうトレーニングを受けて知識を得ることができた。私の場合は、エイズという病気があることを知ったと同時に、どういうふうに感染するかとか、どういうふうにしたら予防できるのかということも同時に教わったので、怖くはなかった。

そこで得た色々な情報とか感染経路とか、そういったことを友達にどんどん教えていった。

今、一番気にかかっていることは、そういう自分達と同じくらいの年齢の人で、感染している人たちというのも、やっぱり結婚したいとか、彼氏・彼女が欲しいとか、家族をもちたいと思っていると思うけれども、そういう人たちがどういう人生を、これから長い人生をどういうふうに歩んでいったらいいのかということを、とても気にかかっている。

※２人とも、もともとエイズの知識を持っていたわけではなく、ＲＴＦに出会ってからエイズに関して学び、そこで得た知識を人々に伝える中で、地域の人々のエイズに対する偏見・差別が徐々になくなっていったことがわかる。まだ偏見・差別がすべてなくなったわけではないが、いかに知識が大事かということを表しているといえよう。また２人は、エイズ遺児の問題や若者たちのＨＩＶ感染者が抱えている問題など、現在の活動の課題を的確にとらえている。

⑧今後どのような地域になってほしいか、自分は地域にどのように関わっていきたいか

＜Ａさん＞

色々な問題がおきた時に、その村の人たち自身で、自分達の村の問題を解決できるようになってほしいと思っている。というのもラックス・タイの目的、活動の目的自身もそういうものだから、私達の思っていることも近くて当然だと思うのですけれども…。

今、なるべく心がけていることは、色々な活動をするにあたって、村でのプロジェクトを実施する時も、村の人たちもなるべく入ってもらって、ラックス・タイができることは何なのか、村の人たちがやるべきことは何なのか、将来的にはこんな問題がおこってくるかもしれない、そういう時にはどうしたらいいかというようなことを、村の人たちと話し合っていきながら、その問題に対する取り組み方というのを示していく、そういうことを心がけている。

将来的には、自分としてはここ（ＲＴＦのスタッフ）をやめると思うけれども、村に帰って、村の中での自分の役割というのは、例えば何か困ったことがあったら、その人の相談役として色々な相談にのってあげたいと思っている。自分は、ここでの活動経験として、色々な知識を持っているので、例えばエイズのことに関してとか、性と生殖のことについてとか、色々なことについて自分の持っている知識というのを、その村に帰った時に活用することができるのではないかなと思っている。

その対象は、誰でも、子どもから大人まで、老人まで、誰にでも協力していきたいと思っている。

＜Ｂさん＞

将来的にどの地域においてもそうだと思うけれども、色々な問題、例えばエイズでもそうだし、薬物の問題でもそうだし、児童虐待の問題でもそうだが、そういうコミュニティの中でいろんな問題に直面した時に、コミュニティの住民達自身の手でそういう問題を、解決とか改善していけるようになってほしい。

たぶん将来的には、私も自分の村に帰って、今までこうやって経験してきた自分のスキルとか知識を活かして、村の人たちのために働いていきたいと思う。10年以内には。

※２人ともどんな地域であってほしいかという明確な地域像を持ち、将来は自分の出身地に帰ってユース活動やＲＴＦで身につけた知識やスキルを地域のために役立てたいという思いを持っている。その意味では、ユース活動やＲＴＦの活動が地域リーダーの養成の役割をも担っているといえるであろう。

４．考察

以上がＲＴＦの２人の若者スタッフに聞き取り調査を行った結果である。聞き取り調査からは、２人がＲＴＦの活動に出会い、活動の中でどのように成長してきたのかがわかる。以下、聞き取り調査から明らかになった地域リーダー養成のための要件を指摘することにより、まとめとしたい。

２人は、まず地元でのユースグループの活動に参加し、様々なトレーニングを受ける中で活動に必要な知識やスキルを身につけ、またその知識やスキルを同じ年代の仲間に伝え、地域の大人やＲＴＦの支援を受けながら活動を行っていた。その後、ＲＴＦのスタッフとなり現在に至っているわけであるが、その中ではユースグループ時代に培った知識やスキルを活かしつつ、大人も含めたさらに幅広い対象に支援活動を行う中で、自信をつけ自己信頼感を高めるとともに、大人と対等に意見交換や交渉できる力を身につけ、地域はどうあるべきか、地域支援はどのようにあるべきかを学び、将来的には地元に帰って自分の培った能力を地域に役立てたいと思うようになったといえる。現在２人はＲＴＦのスタッフとして、パヤオの子どもを対象とした活動を中心に地域コーディネーターとしての役割を果たしている。将来、地元に帰ったら立派な地域リーダーとして活躍することであろう。まさに、ユースグループでの活動、ＲＴＦでのボランティアやスタッフとしての経験が地域リーダーを育てる役割を担っているといえよう。

その中で、地域リーダー養成のための要件として重要であると思われる点を指摘しておきたい。まず、一点目に同世代の仲間関係があることである。ＢさんはＡさんに誘われたことが活動に参加するきっかけになっており、また自分に自信がなかったＡさんは仲間の中で自己表現をしていくことにより自己信頼感を高めていった。同世代の仲間との関係が重要な役割を果たしているといえるであろう。二点目には、その活動をサポートする大人がいることである。２人のユースグループ時代の活動には、資金の援助をしてくれた地域の大人や活動に対する色々なアドバイスをしてくれたＲＴＦのスタッフがいた。若者の活動を温かく見守り、時には一緒に活動したり、支援したりしてくれる大人の存在が必要であるといえよう。三点目には、学習の継続である。２人はユースグループで活動を行っている時から、実に多様な実践的なトレーニングを受けていた。ＲＴＦのスタッフになってからは、少なくなったようではあるが、新たなプロジェクトの担当になった時など、活動に必要なトレーニングを受講している。また、四点目として子どもの頃から、地域で様々な世代と交流したり、一緒に活動したりしていくことの重要性である。小さな頃から自分とは違う様々な世代と関わることにより、自分が将来、どんな青年や大人になり、どのように地域と関わっていくのかについて考え、目指す自分像を描くことができる。つまり多世代との交流により、その時々の年代に応じた様々なロールモデルに出会うことができるということである。実際にＲＴＦが活動支援を行っている別の青年ボランティアに聞き取り調査をしたときに、「なぜ自分は熱心に意欲的に活動を行っているのか、自分でどう思うのか」という質問に対して、その青年ボランティアは、Ａさん、Ｂさんを含めたＲＴＦのスタッフが大変好きで信頼しており、とても居心地がいいからと答えるとともに、まだ将来はわからないが、自分もＲＴＦのスタッフとして働くこともいいかなとも考えていると答えている。まさに、ＲＴＦのスタッフがロールモデルの役割を果たしているといえよう。また、多世代との交流の中で、自分とは異なる世代とのコミュニケーション能力を身につけら

れることも重要な点である。多世代と交流したり一緒に活動したりする中で、自分より目上の世代とのかかわり方や年上が年下を面倒みることの必要性、かかわり方を学ぶ機会となる。ＲＴＦが支援を行い、地域のエイズの患者グループのボランティアが行っている子ども活動を見学させていただいた時にも、子ども同士、子どもとボランティア・スタッフの関わりの中でそのような場面が幾度となくみられた。また、Ａさん、Ｂさんの２人も、ユースグループの時代から資金援助をお願いしたり、施設を借りるために学校の先生に交渉したりする中で、大人とのコミュニケーション能力や支援能力を身につけてきた。

以上、四点の要件が揃うことにより、地域リーダーの養成が可能となるのではないだろうか？この四点は、一見すぐにできそうなことではあるが、実際には難しいことかもしれない。かつての日本では、子ども会から老人会まで年齢層に応じて地域に関わる組織がどこの地域にもあり、年齢に応じてその組織に所属し活動に関わる中で、地域で一人前になるための資質を身につけてきた。高度経済成長期以降、それらの地縁組織は衰退し、地域に関わる活動を様々な年齢層が連携して行っていくことは難しくなっているといえよう。しかしながら、門脇が、若い世代の「非社会化の進行」の根源は、若い世代の「社会力の衰弱」にあり、「非社会化」する時代の教育と子育てにおいて重要なことはこの衰弱した「社会力」を育てることであると指摘しているように[14]、まさに次代を担う若者の「社会力」の養成は急務であるといえよう。若い世代の「社会力の衰弱は」若い世代の問題だけでなく、大人の側にも責任がある。若者が、コミュニケーション能力を身につけ、地域でいきいきと学習し、活動できるような場が求められているといえるのではないであろうか。その中で、検討した地域リーダーとして必要な能力も身についていくものと思われる。そのためには、このような活動に若者をどのように巻き込んでいくのかということが課題となると思われるが、それは今後の検討課題としたい。

1 斉藤進「まちづくりと市民」（倉沢進・小林良二『改訂版地方自治政策Ⅱ　自治体・住民・地域社会』放送大学教育振興会、2004年）57ページ。

2 同上。

3 龍谷大学地域人材・公共政策開発システムオープン・リサーチ・センター編・土山希美枝著『地域人材を育てる自治体研修改革』地域ガバナンスシステム・シリーズＮｏ．１（公人の友社、2005年）7ページ。

4 同上。

5 佐藤快信「諫早市子育て支援ネットワーク養成講座2004年度　地域福祉の役割と地域リーダーの動向について」（http://www.wesleyan.ac.jp/brog/categoly/51/blogiol/8最終アクセス日2008年１月18日）。

6 世古一穂著『協働のデザイン』学芸出版社、2001年、117ページ。

7 同上。

8 入江詩子「住民参加型福祉における主体形成に関する一考察」（長崎ウエスレヤン短期大学『地域総合研究所所報』第10号、2001年）、入江詩子・菅原良子・開浩一「社会開発としての子育て支援事業のあり方をめぐって」（長崎ウエスレヤン大学地域総合研究所『研究紀要』５巻１号、2007年３月）を参照。

9 ＲＴＦの組織概要と活動内容については、入江・菅原・開同上論文のほか、ＲＴＦホームページ(http://www.carethai.npo-jp.net/index.htm)を参照した。

10 パヤオの概要に関して詳しくは、入江・菅原・開同上論文、59―60ページ参照。

11 同上、63ページ。パヤオにおけるRTFの取り組みについては、他に入江前掲論文を参照。

12 聞き取り調査の結果に関する記述は、すべて聞き取り調査を行った2006年７月時点の内容である。以下の内容については聞き取り調査のほか、「コドモファンド通信」（Care／ラックスタイ財団発行）による。

13 アンプーと呼ばれる郡の下位組織であり、ムーバーンと呼ばれる村の上位組織。タンボンは人口600人くらいの村が10カ村程集まった、タイの地方行政組織の一つである。

14 門脇厚司『子どもの社会力』（岩波新書、1999年）、同『親と子の社会力』（朝日選書、2003年）。門脇は、「社会力」を「人が人とつながり社会をつくっていく力」であるとしている。

謝辞　この論文作成にあたっては、聞き取り調査をサポートしてくださったＲＴＦの皆さん、また調査にご協力いただいたＲＴＦスタッフやボランティア、タイパヤオの方々、長時間にわたり通訳をしてくださった方々に感謝いたします。

※本研究は本学地域総合研究所の特別研究［2006
Ｂ１］の研究助成に基づく研究成果である。